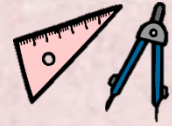




算数・数学部報



小2020・中2021年度の新学習指導要領実施に向け、 改訂内容を十分に踏まえた、確実な準備を！

岡崎市現職研修委員会 算数・数学部長 田村康則

小学校は2020年度、中学校は2021年度からの新学習指導要領の全面実施を控え、その前年・前々年の2年間が移行措置期間となっています。今回の改訂では、「社会に開かれた教育課程」を目指し、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善が求められています。今、キーワードとなっているこの「深い学び」を、私は「他との関わりを通して自分の考えを広げ深めること」と捉えています。子供の姿として「授業で自分なりの理解を実感し、その後も自ら探求し次の学びにつなげようとする姿」や「新たに得た考えを他の場面で生かそうとする姿」が見られる授業でありたいと考えます。そのためには、授業ごとに、子供に育みたい力を明確にし、子供の実態をよく把握した上で、それを踏まえた授業づくりを行うことが大切です。

また、各教科の特質を「見方・考え方」という観点で捉え、それに基づいて育成を目指す「資質・能力」が再整理されました。私たちは、今回の改訂内容を十分に理解し、それに応じた授業改善を試みていく必要があると考えます。

ところで、今年度も、算数・数学部では、指導員や世話係の先生を中心とし、各学校の主任の先生方のおかげで多くの成果を挙げることができました。1月25日に行われた主任会では、ホームページ（部報）、授業改善（基礎学力）、アイデア（研究集録）、研修（読書会）の4つの委員会の今年度の活動報告が行われ、来年度の活動についても確認し合いました。今年度の具体的な成果としては、「授業力の向上を目指した読書会の実施」、「額田中学校の永井利昌先生を授業者にお招きしての授業研究会の開催」、「県数教・日数教・県教研・東数教等の研究大会への参加」、「全国や県の統計グラフコンクールにおける数多くの入賞」等です。皆さんの積極的な参加によりどの活動も活発に行われたことを嬉しく思います。主任会後に、指導員の先生によるiPad講習会も行われました。「COCOAR2」を使って、教科書の絵が動く様子を見たり、立体を動かして多方向から観察したりすることができました。どちらも子供自身での操作が可能です。ぜひ各学校でも広めてください。

最後になりますが、『基礎学力調査のまとめ』、『部報』、『研究集録』、『アイデア集』等の活用についてお願いします。苦勞して作成されたこれらの冊子を、授業のまとめや授業改善に是非ご活用ください。また、各学校の多くの先生方にお使いいただけますよう算数・数学主任の先生で、目に付くところに置いてもらうなどして広く宣伝してください。いよいよ年度末になります。この1年間の指導を振り返り、新たな課題を見つけ、次年度への方向性を考えながらまとめをしてください。小中学校では、この2・3年間が大きな変革期となります。今後も算数・数学部に対しまして、一層のご理解・ご協力をお願いいたします。

新出版本を執筆中です。

現在、算数・数学部授業研究会では、『数学指導の疑問これですっきり』に次ぐ出版本『算数科における深い学び(仮)』を鋭意執筆中です。新学習指導要領では、「資質・能力」の向上とともに、「数学的な見方・考え方」が大切なキーワードとなっています。では、「数学的な見方・考え方」とはどのようなものなのでしょう？これまでの評価の観点として用いられてきた「数学的な考え方」と違うことは分かっているけれども、明確に答えづらいというのが実情かと思えます。本書では、ずばり「数学的な見方・考え方」とは何か、そして、「数学的な見方・考え方」をどう働かせて、深い学びにつなげていくかを述べていきます。出版は7月を予定しています。乞うご期待ください。



第7回読書会

2月27日(火)に第7回読書会が総合学習センターで行われました。



『本年度を振り返って』というテーマのもと、福岡小の齋田宙夢先生と羽根小の手嶋夕菜先生、矢作中の鈴木佑典先生の3人が新任の先生を代表して実践発表を行いました。齋田先生の発表では、小学4年で学習する「面積」の単元を「広さ比べ」の実践を通して、主体的に学び、筋道を立てて考える児童を育成する内容の発表でした。手嶋先生の発表では、小学4年で学習する「折れ線グラフ」の単元を、自分の考えをもつ場や話し合いの場での必要な教師支援を行うことで、考えを深める児童を育成する内容の発表でした。また、鈴木先生の発表では、中学2年「連立方程式」の単元を、生徒の興味を引く課題を設定することで、より活発な関わり合いが生まれ、理解を深めることができる生徒を育成する内容の発表でした。どの実践も、新任の先生らしく、児童・生徒が授業に主体的に取り組むことができるよう、工夫されていた実践でした。参加された先生方からも、激励の意味も込め、積極的な意見交換がありました。また、助言者の先生からは、今学んでいることが、今までの学習やその先の学習とどういうつながりがあるかを考えながら授業を組み立てることの重要性について助言していただきました。

【読書会参加者の感想】

どの実践も、子どもたちが意欲的に問題解決をする姿が思い浮かぶものであり、質疑応答も含め、多くのことを学ばせていただきました。福岡小の齋田先生の「面積(4年)」では、疑問を次時の課題につなげていること、羽根小の手嶋先生の「折れ線グラフ(4年)」では、お助けボードの活用、矢作中の鈴木先生の「連立方程式(中2)」では、自作問題に取り組みさせることなど、私も普段の授業で取り入れたいと思いました。柴田先生と三浦先生からは、既習内容との関連付けを明確にすることで、今後への見通しを持ち、理解力を高めることができると教えていただきました。これからの授業で、子どもたちに何を学んでほしいのかを明確にして授業を行っていきたいと思いました。(城南小 吉田唯華)

読書会の詳しい内容につきましては、算数・数学ホームページ
<http://cms.oklab.ed.jp/sugaku/index.cfm/1,html>をご覧ください。

指導員訪問を終えて

来年度に向けて

新学習指導要領実施に向けての移行期間が進んでいきます。一部の内容は指導時期が改められ、中には教師自身が学習したことのない内容が盛り込まれています。よって、これまで以上に教師は教材研究に励み、単元の系統性やそこで働く数学的な見方・考え方がどのようなものであるかを意識して指導に当たる必要があります。授業における具体的な手だてとして、前時との違いを発問し、子どもに本時の学びへの見通しをもたせ、振り返りを通して本時の学びを確認することを大切にしていきたいものです。こうしたことを踏まえた日々の授業の積み重ねが、子どもの算数・数学科としての資質・能力の向上につながると考えます。(算数・数学科指導員 加藤良彦)

来年度に向けて

書籍や他社の教科書から教材を探したり、自分で教材を開発したりし、目の前の子供の実態に合わせた教材を開発しての授業が見られました。そういう授業は、やはり子供の学習意欲が高まり、主体的な学びへとつながっています。1年に1単元くらいは、学級の子供の実態に合わせ、子供が自ら解決したいという思いがもてる教材の開発をしていきたいものです。

また、「時間が足りなくなってしまった」と、振り返りをできずに終わってしまう授業が度々ありました。振り返りは、何を学んだのか、学び方がどうであったか、1時間を振り返る大事な活動であります。振り返りの時間までを見通して授業を組み立て、さらに、振り返りを学級で共有し、次時につなげることを意識した授業づくりを目指してほしいと思います。

(算数・数学科指導員 秀野亜友)